

国語

※解答はすべて解答用紙に記入すること。

一、次の①～⑩の——線について、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは漢字に直さない。

- ① 従順な態度をとる。
- ② 商品のデザインを刷新する。
- ③ 臨時列車が運行する。
- ④ 樹液が垂れる。
- ⑤ 歴史を感じる築城跡。
- ⑥ シキン距離。
- ⑦ タイシユウに人気の雑誌。
- ⑧ この高いイチゴはベツカクな味がする。
- ⑨ 今年はコクモツの実りが良い。
- ⑩ 街頭でシヨメイ運動をする。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の関係で、一部省略している部分があります。)

生物の絶滅にはいろいろなパターンがありますが、最近人間が大きく関与している絶滅がとても多いのです。その最も極端な例としては、リヨコウバトの絶滅が挙げられるでしょう。

リヨコウバトは、北米大陸の東岸に棲息していた、渡りをするハトで、その個体数は鳥類史上最多といわれるほどたくさんいたのですが、二〇世紀のはじめに絶滅しました。

《中略》

リヨコウバトは一八世紀には北米に約五〇億羽もいたと言われています。世界の鳥の中で最大の繁栄を誇っていた鳥だったので人間がいま全世界で七八億人ですから、北米大陸の東側だけで五〇億羽というのは大変な数です。

《中略》

リヨコウバトの営巣地は大きなものでは八五〇平方マイル(二二〇〇平方キロメートル)ほどだったようですが、そこに一・三六億羽が棲息していたという記録があります。相当な密度で暮らしていたことになりましたが、そういう生活で互いにコミュニケーションを密にすることによって群れで繁栄していたようです。

リヨコウバトの産子数はそれほど多くはないのです。鳥によっては一度に何個も卵を産みますが、リヨコウバトはほとんど一個か、せいぜい二個しか卵を産まなかった。にもかかわらず個体数が多かったのは、天敵がほとんどいなかったからでしょう。そして、何度も繁殖をしますから、【X】ひとつのつがいが一年に一羽しか育てないとしても、その回数が重なっていくので、ある程度の個体数が死んでも、全体数は増えることになります。

ただ、リヨコウバトの習性はわりとかつちりと決まっていて、フレキシビティーがあまりなかった。リヨコウバトは必ず自分の生まれた巣に戻ってきます。大きな巣には億を超えるリヨコウバトが暮らしていることになるわけですが、そこで人間が何をしたかという、かすみ網を張り、巣に帰ってくるリヨコウバトをまさに一網打尽に捕まえたのです。そして、営巣地のそばに缶詰や羽毛布団の工場を建て、捕まえたリヨコウバトを食用に加工したり、羽毛製品を作ったりするということを、いわばベルトコンベヤー式にやりました。リヨコウバトは何十億羽もいるわけだから、たくさん捕ってもそんなに減らないだろうと思っていたのかもしれませんが。

それが、あるときから急にいなくなりました。一八五〇年頃から減少傾向が激しくなり、一九世紀の終わりにはほとんどいなくなってしまうしました。五〇億羽いたリヨコウバトが、たった一〇〇年の間に激減し、一九〇八年には全米で七羽しかいなくなってしまうのです。

そして、先述のように動物園で飼育されていたマーサが一九一四年に死んで、①リヨコウバトは絶滅しました。そんなわけで、リヨコウバトは人類による殺戮で滅ぼされた最大の例といえるでしょう。減少していく過程で保護が試みられたこともあったのですが、いったん大きく減った個体数を回復することはできませんでした。リヨコウバトは大きな群れで移動して繁殖する性質があったと先述しましたが、逆に言うと、小さな集団ではなかなか繁殖できなかったのです。リヨコウバトが特殊な環境にだけ適応しているような習性の鳥ではなく、もう少しフレキシビティーを持っていれば、絶滅することなく生き延びることができたのかもしれない。

個体数が多くても、ひとつの環境に密集している生物は、あるひとつの大きな要因によってあっという間に絶滅する確率が高い。

【Y】、まばらに分布している生物のほうが絶滅しないこともあるのです。

リヨコウバトはアメリカにおける人為的な生物絶滅の最大の例ですが、他にも、アメリカにはアメリカバイソンというウシがいて、これは絶滅はしていませんけれども、人間に狩られることによって絶滅しそうになった動物です。

北アメリカの先住民のネイティブ・アメリカンは古くからアメリカバイソンを狩ってその肉を食べていましたが、それによって絶滅

の危機に瀕するほど数が減少するようなことはありませんでした。むしろ、ネイティブ・アメリカンとアメリカバイソンはしつかり共存していたといえるでしょう。白人が獵銃リョウジュウを使って狩獵シヨリョウをするようになってから、アメリカバイソンの数は急激に減少したのです。

一九世紀初頭にはアメリカ全土に七五〇〇万頭のアメリカバイソンがいました。

#### 《中略》

そんなアメリカバイソンが一九世紀なかばから、主に食用と皮革用に狩られていきました。アメリカバイソンは、タン（舌）が美味ウマイいと言われています。だから、タンだけを取るために狩獵したケースも多かったようです。

大陸横断鉄道が敷設※ちふせつされると、列車から銃で撃つ狩獵ツアーも行われました。それは、ただの娯楽としての殺戮です。「おれはアメリカバイソンを××頭も撃って殺したぞ」と言っただけは、その腕を競っていたのです。多くのアメリカバイソンは、単に射殺されたまま、何に利用されることもなく、ただ野に放置されました。

一八六八年から一八七四年まで、最低で年間二〇〇万頭、多い年では七〇〇万頭もアメリカバイソンを殺していたという記録があります。年間に七〇〇万頭も殺せば、いくらもともと七五〇〇万頭もいたとしても、すぐにいなくなってしまうます。

実際、一八八九年には、アメリカバイソンはだいたい二〇〇頭〜一〇〇〇頭くらいに減ったといわれています。それで、アメリカの政府が一八九四年にイエローストーン国立公園を②アメリカバイソンの保護区としたのです。

それまでなぜ保護しようとしなかったかという点、いろいろな理由がありますが、大きな狙いのひとつは、ネイティブ・アメリカンを服従させるためでした。アメリカ政府は、農耕の習慣がなく狩獵採集民だったネイティブ・アメリカンの主要な食料であったアメリカバイソンを保護するどころか、むしろ積極的に殺し、その食料源を絶つていったのです。そのため、白人の支配に抵抗していたネイティブ・アメリカンは、狩獵ができなくなり、食糧不足に陥って、アメリカ政府の支配下に入らざるをえなくなりました。ネイティブ・アメリカンがアメリカ政府の言いなりになるころになってはじめて、アメリカ政府はアメリカバイソンの保護策を始めたのです。

#### 《中略》

ネイティブ・アメリカンはアメリカバイソンを狩って、その肉を食用としただけでなく、毛皮を衣服にし、骨を鏃ヤジリなどに利用していました。それは、かつて日本人がクジラを捕って、その肉を食用にし、骨を刀剣や工芸品に用い、髭ひげまで呉服尺等に利用していたことを思い起こさせます。

かつて欧米人の捕鯨ほげいの目的は主に鯨油の採取で、一部の国・地域を除けば、肉は捨てられていました。そして、石油が容易に供給されるようになると、それが鯨油にとってかわったので、捕鯨の目的が失われたのです。

いまはクジラを保護しようという声が世界の大勢ですが、それは、クジラを捕る目的がとくにないからです。③多くの国は、そこに利害関係がないから、保護（捕鯨禁止）に容易に賛同します。日本やノルウェーなどクジラを広範に利用してきた国だけが、いまでもクジラを捕りたいと主張していますが、その声は「自然保護」という言葉に阻はばまれてしまっているわけです。

「自然保護」「動物保護」が大事だと言われますが、一方でウシはほとんど殺されて食べられているわけで、もちろん、それもまた人間のご都合主義です。

アメリカバイソンは、いまは三万頭ほどいるようです。現在は嚴重に保護されているのですが、かつてほどにはアメリカバイソンに合った環境が多くはないので、いまのキャリング・キャパシテイ（環境収容力）いっぱいのところまで増えた数が約三万頭ということなのでしょう。

キャリング・キャパシテイの大きさが何によって決まるかといえば、食べ物や気候や棲息場所の状態です。ただ、そういったものによって決まる、もともとのキャリング・キャパシテイがどんなに大きくても、ほとんどの場合は、天敵や病気などによって抑えられ、実際のキャパシテイは本来のそれより小さくなっています。

ところがいま、人間には天敵はいませんし、病気も減りました、地球上に七八億人もいるというのは、実現可能な最大のキャリング・キャパシテイ近くまで人類が増えていく状況だといえるでしょう。二一〇〇年には一二億人になるという予測がありますが、一二億人になるとしたら、もっと食べ物が増えないと飢えに直面する人が増えることになります。

キャリング・キャパシテイが増えれば人口も増えるのは生物学的必然といえるのですが、どんどん食べ物が増え、人口が増えて、労働力が豊富にあるということを前提にしたグローバル・キャピタリズムが世界を覆おほっているのです。いま、ややこしいことが起こっているのです。今後、人口が増え続ければ食糧不足や資源不足になるのは明らかなのです。もう子どもを産まないとか、産んでもひとりだけとか、そのようにすることで、人口を半分くらいに減らしたほうが、ほんとうは良いはず。人口が半分に減り、資源量が同じならば、ひとり当たりの資源量は《A》になるわけですから、本来ならばそのほうが個々人が豊かになるのです。しかし、人口が減ればグローバル・キャピタリズムは成立しなくなります。だから、現代社会で人口を減らす方向にはなかなか力が働かないのです。

日本でいえば、いま、「労働力が足りない」ということ。《B》労働力が足りない、ということ。《C》労働力は日本国内にあります。時給五〇〇〇円を払えばいくらでも働く若い人はいるのです。彼らは時給数百円では働かないということであって、途上国から来る人は時給数百円でも働くのですから、むしろそのほうがありがたいという、働かせる側の都合の話なのです。

(注)※1 「営巢」：動物が繁殖などのために巣を作り、そこで子育てなどの活動を行うこと。

※2 「フレキシビリティ」：変化に対する適応性。

※3 「かすみ網」：小型～中型の野鳥を捕まえるために使われた、細い糸で作られた網。

※4 「マーサ」：アメリカのシンシナティ動物園で飼育されていた、リヨコウバトの最後の個体で、標本がスミソニアン博物館に残っている。ジョージ・ワシントン夫人にちなんでマーサと名付けられた。

※5 「敷設」：鉄道や道路などを長くのばして、敷くように設置すること。

※6 「呉服尺」：江戸時代まで和服を測るのに用いられていた物差し。

※7 「グローバル・キャピタリズム」：世界中の国々が一つの大きな市場のように結びついて、自由に金銭のやり取りや商売をすること。

問一 本文中の空欄【X】、【Y】に当てはまる語として、最も適切なものを次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア たとえ      イ もし      ウ ところが      エ むしろ      オ そして

問二 □で囲まれた「網打尽」の意味として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 一度に全部を捕らえること。      イ 一部だけを捕らえること。  
ウ 何度かに分けて捕らえること。      エ 捕らえて独り占めにする。

問三 ——線①「リヨコウバトは全滅しました」とありますが、なぜリヨコウバトは全滅したのですか。その理由を二つ書きなさい。

問四 ——線②「アメリカバイソンの保護区としたのです」とありますが、そのときまでアメリカ政府がアメリカバイソンを保護しなかったのはなぜですか。次の三つの《語句》を必ず用いて、分かりやすく説明しなさい。

《語句》 「ネイティブ・アメリカン」 「狩猟」 「食料(食糧)」

問五 ——線③「多くの国は、そこに利害関係がない」について、次の(1)、(2)に答えなさい。

(1) 「そこ」の指す具体的な内容を、解答欄の形式に従って「〜こと。」に続く形で答えなさい。  
(2) 「利害関係」がない理由を、分かりやすく説明しなさい。

問六 本文中の空欄《A》に当てはまる語として、最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 半分      イ 四倍      ウ 倍      エ 同じ

問七 本文中の空欄《B》、《C》に当てはまる語の組み合わせとして、最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア (B 高い C 高い)      イ (B 安い C 安い)  
ウ (B 高い C 安い)      エ (B 安い C 高い)

問八 次の《脱落文》は、本文中のある段落の末尾にあったものです。戻すとしたら、どの段落の最後に戻すのが適切ですか。戻す場所の直前の十字を答えなさい。ただし、句読点は含まないものとします。

《脱落文》 実際、最初のうちは捕っても捕ってもリヨコウバトの数はあまり減らなかつたのです。

問九 次の文の中から、本文の内容を説明したものととして最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア リヨコウバトはたくさん卵を産むわけではないが、渡りをしてより適した環境になじむことができたので、繁栄した。  
イ リヨコウバトとアメリカバイソンは、人間がその絶滅や個体数に大きく関与した動物の例として挙げられたものである。  
ウ クジラを保護するかどうかは、日本やノルウェーなどのクジラを広範に利用してきた国の主張に大きく左右されている。  
エ 天敵がいらない人間は今後も必然的に繁栄していくと考えられるが、それは世界全体にとって望ましいことである。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の関係で、一部省略している部分があります。)

中学三年生のぼく(北沢良一)は進路をめぐって両親との関係がぎくしゃくしており、自宅でピアノ教師をしている母には内緒で、ひそかに音楽高校受験を考えている。これまで自由に弾かせてくれたレッスンの先生からも、今の弾き方では合格できないと言われ、また、ぼく自身も今のままの技量ではとてもピアノニストにはなれないことを自覚しており、悩んでいる。

バスを降りて、家に向かう細い坂道を、ゆっくりした足どりで登った。家に帰るのは、気が進まなかった。といって、他にいくところもない。

角を曲がると、私道の奥に、白い車が見えた。地下のレッスン室に明りが点っている。①いくらかほつとした気分になった。夕食前のこの時間は、母がキッチンに多いのだが、今日はレッスンが入ったのだろう。

誰とも口をききたくなかった。父が帰っているわけではないし、孝輔<sup>※1</sup>は例によってマラー<sup>※2</sup>の洪水の中にいるはずだ。玄関の手前の階段を昇りかけた時、母の声が聞こえた。

「良一、良一」

ぼくの名を呼んでいる。地下の方をのぞくと、レッスン室のサッシが開いて、母がこちらを見上げていた。

「こっちへ来なさい」

②いやな予感がする。母は地下の窓からぼくが帰ってくるのを見張っていたみたいだ。

昇りかけた階段を下りて、地下の入口に向かった。レッスンの生徒はこちらから出入りするようになっていいる。救いを求めるような気分で中をのぞいてみたが、どうやら母は一人きりのようだ。

ドアがぴしゃりと閉まると、いままで聞こえていた戸外の騒音が、不意に断たれて、プールで耳に水が入ったような、変な感じがした。息が苦しい。反対側にも明り通りの窓があり、いちおう風は通るようになっていいるのだが、防音ドアと二重サッシで遮断された地下の空気は、湿っぽくよどんでいる。

「あなた、今日は早退したそうね。塾から電話があったわ」

熱心な塾だ。こういう③通報のサービスも、納入した費用に含まれているのだろう。

「用があったんだ」

「どんな用？」

「友だちの見舞い」

「ほんと？ 誰が病気のの？」

「母さんの知らない友だちだよ。ずっと前から入院している」

「そう……」

④母は言いよどんだ。こちらの答えが意外だったのだろう。けれども母は、すぐに気をとりなおして言った。

「それはいいけど、心配だから、ピアノの先生と聴音の先生に電話したのよ」

予感が的中した。

「あなた、音楽高校を受験するって、本気なの？」

母は自分を抑えようとして、低い声で話している。こういう時ほど、いったん爆発が始まると、すごい勢いになる。

ぼくは素直にうなずいた。

「大学はどうするのよ」

面と向かって詰問されると、答えが返せなかった。ぼく自身、考えがまとまっていない。何年も先のことなんて、いまのぼくには、

縁のない世界だ。

「ピアノニストになるつもりなの？」

ぼくの顔をにらみつけながら、いちだんと低い声で母は言った。鋭く強い眼差しだ。この強さが、どうしてぼくに遺伝しなかったのだろう。「ちょっと弾いてみる？」

⑤答えるどころか、身動き一つできなかった。

「しばらく、あなたの演奏、聴いてなかったわね。一度、じっくり聴いてみたいと思っていたのよ」

追いつめられた、はじめな気分だった。母をびっくりさせろくらいの演奏ができれば、と思った。できない自分が、くやしかった。

「さあ、早く弾きなさいよ」

少しづつ声が高まっていく。逃げようがない。ぼくはレッスン用のグランドピアノに歩み寄りながら言った。

「何を弾けばいい？」

「ソナタよ。一つ仕上がったんでしょ」

「あんまり好きな曲じゃない」

「選り好みなんて言ったられないでしょ。とにかく弾いてごらんなさい」

ぼくはベートーヴェンを弾き始めた。

十五番目のソナタ『田園』。何の感動もない曲だ。

いつかは『アパシヨナータ』や『ハンマークラヴィーア』を弾きたいと思う。胸の底にわだかまっているものを、思いきり鍵盤にぶつけたい。いまはまだ、初期のソナタしか弾かせてもらえない。初期のものでも、八番や十四番は感動的だが、十五番は、穏やかすぎる。初見の時から、気持ちが乗らなかつた。もちろん、指の運動みたいな練習曲でも、勝手に強弱をつけて、盛り上げることはできる。でも、母が聴いたら、卒倒するだろう。母はテンポに厳格で、勝手な解釈を許さない。感情を抑制した、機械みtainな演奏を好む。母の生徒は皆、<sup>⑥</sup>そんな弾き方をする。

指が萎縮しているのが自分でもわかつた。このままではダメだという気持ちと、テンポを崩してはいけないという気持ちが中途半端に混ざって、最後まで集中できなかった。

エンディングの余韻を【A】にするのがつらかつた。早めにペダルから足を下ろして、ぼくは立ち上がった。

「ちょっと待ちなさいよ」

部屋を出ようとしたぼくを、強い口調で母は呼び止めた。

「あんたのいまの演奏では、いくらがんばったって、プロのピアニストにはなれないわよ」

「わかつてるよ」

「じゃあ、どうするつもりなのよ。音楽の大学出たって、就職口なんてどこにもないわよ。中学の先生にでもなるつもり？」

ぼくの腕をつかもうとした母の腕を振りきって、部屋を出た。狭い階段を昇りながら、世界中で一番きらいな人間は、ママだ、とぼくは思った。

二学期が始まった。

始業式のあと、久し振りに音楽室のピアノに触ってみた。

かなり古い楽器で、調律も少し狂っている。それでも部屋が広いから、いつもはもっといい音が出るのだが、今日は調子が出ない。<sup>※4</sup>スケールの指が何度も引っかかった。

バツハを弾き、ツエルニーを弾き、それからベートーヴェンを弾いた。

母の前では、緊張していた。いまはできるだけ大胆に、自由に弾こうと試みた。けれども、指が動かないし、気持ちも盛り上がっていかない。

この曲が、どうしても好きになれない。

ベートーヴェンのような天才でも、たまには失敗作を書く。そんなことを考えてみたが、一流のピアニストは、どんな曲でも、自由に弾きこなす。

結局、ぼくには、才能がないのだ。

ドアが開いて、<sup>※5</sup>宮坂先生が入ってきた。

「どうしたの？ 溜め息なんてついちゃって」

宮坂先生が言った。先生はいつも明るい。この笑顔を見るのも久し振りだ。

「先生」

とぼくは言った。

「こんなこと訊くと失礼かもしれないけど……」

「失礼よ」

ぼくの言葉をさえぎって、先生が言った。

「失礼だと思いながら訊くなんて、そのこと自体が失礼だわ」

「じゃあ、言うのはやめます」

「<sup>⑦</sup>言いかけてやめるなんて、もっと失礼よ。とにかく言ってしまうなさいよ」

先生の顔がますます輝いている。先生の笑顔を見ると、胸の中が暖かい空気で満たされ、友だちみたいに、何でも話せそうな気がした。

ぼくは言った。

「学校の先生って、楽しいですか」

先生の顔が、一瞬、Yこわばった気がした。でもすぐに、もとの笑顔が浮かんだ。

「楽しいわよ。クラスの雰囲気、知ってるでしょ」

ぼくたちのクラスの雰囲気というのは、こんなふうだ。どこの公立中学でも同じだと思うけれど、まず最前列に座っていないと、先生の声が聞こえない。新任の先生などは、声をからして、静かに、と絶叫する。ヴェランの先生は、落ち着きはらっていて、前列の生徒にだけ話しかける。それでも三年生になると、主要五教科の授業は静かになる。いちおうクラスのほぼ全員が、受験ということを念頭において、少しは勉強しようかという気分になるからだ。でも、音楽や美術の時間は悲惨だ。不良っぽい連中は騒ぎたいだけ騒いでいるし、一流私立を目指す優等生は、英語や数学の勉強を始める。都立のトップ校を狙っている数人だけが、内申書を気にして最前列に陣取り、先生の顔をうかがっている、というのが実情だ。

先生は、くすっと笑い声をたてながら、ぼくの顔をのぞきこんだ。

「<sup>⑧</sup>あなたが何を言いたいかわかるわ。でもね……」

急に真剣な顔になって、先生は言った。

「音楽の先生の中にはね、演奏家に憧れて、夢破れて学校の先生になった人もいるわ。でも、子供の頃から先生になるのが夢で、一生懸命がんばって、先生になった人もいるのよ」

そう言うってから、先生はまた笑顔になって、うふっと笑った。

⑨ 胸の奥でわだかまっていたものが、ほんの少し、ゆるんだ気がした。

( 三田誠広『いちご同盟』 )

(注)※1「孝輔」：中学二年生の主人公の弟。マラーが好きでよく聴いている。

※2「マラー」：オーストリアの作曲家。交響曲と歌曲の大家。

※3「ソナタ」：三つか四つの楽章からなる器楽の代表的な形式。

※4「スケール」：音階。

※5「宮坂先生」：ぼくの中学二年生の時の担任で、音楽の教員をしている。

問一 —— 線①「いくらかほっとした気分になった」とありますが、なぜほっとしたのですか。本文中の表現を用いて説明しなさい。

問二 —— 線②「いやな予感がする」とありますが、「いやな予感」とはどのようなことですか。最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 母からあまり好きではないソナタを弾くようにと、強制されるのではないかということ。

イ 母に音楽高校を受験したいということを知られてしまい、反対されるのではないかということ。

ウ 病気で入院している友だちの見舞いに内緒で行ったことを、母に責められるのではないかということ。

エ 母に何も言わずに塾を早退したことを知られてしまい、怒られるのではないかということ。

問三 —— 線X「不意に」、Y「こわばった」の意味として最も適切なものを次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

X「不意に」 ア 不思議と

イ 無意識に

ウ 急に

エ 完全に

Y「こわばった」 ア かたくなった

イ 緩んだ

ウ しょんぼりした

エ しかめた

問四 —— 線③「通報のサービス」とは、具体的にどのようなことを指しているのですか。二十字程度で簡潔に答えなさい。

問五 —— 線④「母は言いよんだ」とありますが、なぜ言いよんだのですか。その理由を分かりやすく答えなさい。

問六 —— 線⑤「答えるどころか、身動き一つできなかった」とありますが、このような「ぼく」の様子を表した表現として、最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 袋のねずみ

イ 石の上にも三年

ウ 泣き面に蜂

エ 蛇ににらまれた蛙

問七 —— 線⑥「そんな弾き方」とはどのような弾き方ですか。本文中の表現を用いて簡潔に答えなさい。

問八 本文中の空欄【A】には、体の一部を表す漢字一字の語が入ります。最も適切な語を考えて答えなさい。

問九 —— 線⑦「言いかけてやめるなんて、もっと失礼よ」とありますが、どのようなことと比べて「もっと失礼」なのですか。「〜こと。」という語に続くように、本文中より十字程度で抜き出して答えなさい。

問十 —— 線⑧「あなたが何を言いたいか、わかるわ」とありますが、先生はこのとき「ぼく」がどのようなことを言いたいと思っ  
ているのですか。本文中の表現を用いて分かりやすく説明しなさい。

問十一 —— 線⑨「胸の奥でわだかまっていたものが、ほんの少し、ゆるんだ気がした」とありますが、これはどのような様子になったことですか。最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 音楽の道に進む上で、演奏家になれない人が仕方なく中学の先生になるのだと考えている母とは違った先生の意見に、つかえが取れた様子。

イ ベートーヴェンの曲がうまく弾けず、自分にはプロのピアニストになる才能がないと落ち込んでいたが、先生の笑顔に励まされ勇気づけられた様子。

ウ プロの演奏家になる夢をあきらめて、中学の音楽の先生になれば、好きではないソナタを必死に練習する必要がなくなることに気付いて、安心した様子。

エ 音楽高校への進学に反対する母と、逆にその道をすすめる宮坂先生の間で揺れていた気持ちに踏ん切りがつき、はればれとした気持ちになった様子。